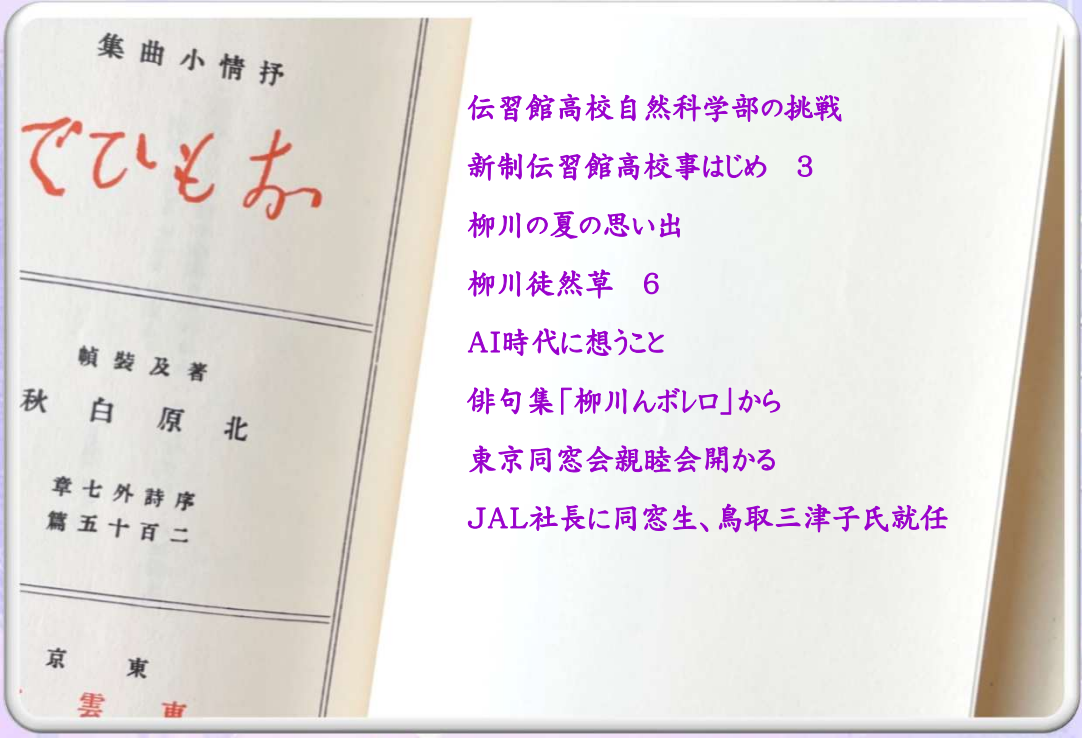
伝習館
東京同窓会会報

2025.1.1



伝習館高校自然科学部の挑戦

新制伝習館高校事はじめ　3

柳川の夏の思い出

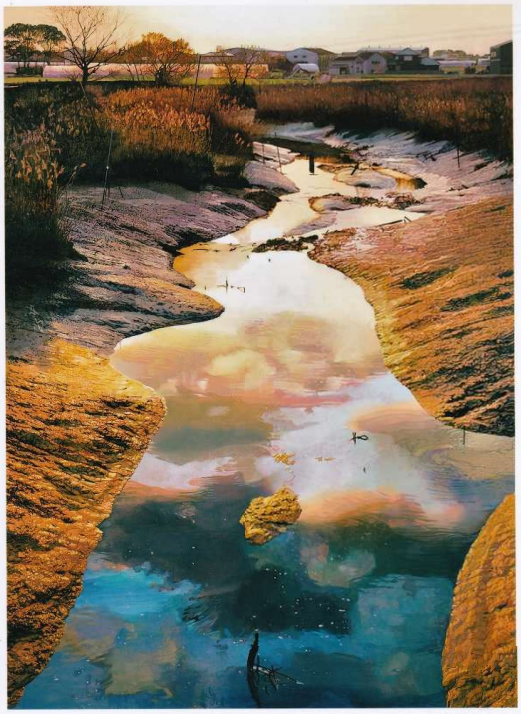
柳川徒然草　6

AI時代に想うこと

俳句集「柳川んボレロ」から

東京同窓会親睦会開かる

JAL社長に同窓生、鳥取三津子氏就任



第91回独立展（2024）　夜明け　池末　満

2024年白秋祭

第25号　2025.1.1

伝習館　東京同窓会会報

表紙絵　高21　池末　満「夜明け」

第91回　独立展出品作、200号。早暁の光が川の両岸を黄金色に染める、故郷の早春の情景。

東京同窓会本部だより

・25号目次 ……1
・令和７年年頭の挨拶 会長・白谷政則　東京同窓会総会の告知 ……2
・webサイトオープンのお知らせ ……3
・学年幹事会活動報告,東京同窓会決算報告 ……5
・伝習館東京同窓会学年幹事及びサポーター名簿,伝習館高進路状況……6
・賛助金ご協力状況報告 ……5
・賛助金通信欄コメント ……7
・伝習館高校自然科学部の挑戦 ……8

同窓会会員寄稿・先輩後輩より

・新制伝習館高校事はじめ　その３　高４　渡邊喜亮 …… 9
・柳川の夏の思い出　高４　荒井健之輔 ……15
・柳川徒然草　その６　高４　小野硯一郎 ……18
・ＡＩ時代に想うこと　高41　下河敏彦 ……19
・俳句集「柳川んボレロ」から　高２　斜庵・小野善睦 ……20
・季節の絵はがき　高14　井上晴美 ……22
・高志会同期会終了のお知らせ　高４　渡邊喜亮 ……22
・賛助金の振り込み方法，会報原稿募集，　編集後記 ……23
・Topics　ＪＡＬ社長に同窓生、鳥取三津子氏就任　他 ……24

永き歴史と輝く未来

～ Denshukan Tokyo Dear Friend ～

東京同窓会本部より【令和７年度 年頭挨拶】

伝習館東京同窓会会長　白谷政則

明けましておめでとうございます。皆様にはいつも東京同窓会の活動にご理解ご協力いただき、有り難く厚く御礼申し上げます。

母校伝習館は一昨年２００周年を迎え次の百年へと新しいページを歩み始めていますが、我々東京窓会も百年先とまではいかなくても５年後10年後を見据えて鋭意改革に取り組んでおります。数年前に「会報改革タスクフォース」を立ち上げ、会報を従来の冊子から電子版へ移行できないか検討を重ねてきましたが、先のアンケートからも300名以上の方は従来通りの連絡や冊子配布を希望していることから、今すぐ電子版移行は躊躇せざるを得ません。特に賛助金協力者には冊子版希望の声があります。しかし東京同窓会の会員全員に送るのは無駄が多く、何処かで線引きしなければ東京同窓会そのものの活動が先細りになる恐れもあります。一年前に伝習館高校東京同窓会ホームページを開設したのを機会に今回からは全員への配布を中止しました。この会報25号は冒頭のように東京同窓会にご理解ご協力いただいた方のみお送りしていますことをご了承下さい。お友達で会報が届いていない方がいたらホームページから会報の創刊号より全て閲覧できますので、その旨教えてあげて下さい。そして賛助金の協力もよろしくお伝えください、お願いいたします。

ＪＡＬの社長に就任された鳥取三津子さん、発表当初は新聞やＴＶでは福岡県久留米市出身、 長崎活水短大卒と紹介されましたが、どのマスコミにも出身高校は書いてなかったので東京同窓会ＨＰに速報を載せました。東京福岡県人会では初の女性社長誕生!!どこの高校？と探しまくったがどこにも該当なし、誰かが我々のＨＰを見つけ「伝習館げなぁ」と静かになったそうです。その後はウキペディアにはちゃんと伝習館高校卒業と書かれています。昨年11月には丸の内の“柳川フェア”のチラシを掲載しました。リアルタイムに発信することがホームページの強みですので皆さんと情報を共有できるよう活用していきます。

次に東京同窓会の運営についてのお知らせです。現在は学年幹事会の充実、常任幹事や役員の若返りに取り組んでいます。学年幹事会は年３回開き東京同窓会の行事(総会・交流会・会報・その他)をやるかやらないか、やる場合は実行委員(責任者と担当学年)を決めるのが主な仕事です。学年幹事会は土曜日の午後に開いていますがリモート参加出来るようウェブ会議にしていて幅広い年代の意見を聞きながら東京同窓会の基本方針を決定しています。ウェブ会議やホームページ等は若い人の知恵、能力で成り立っています。これからの情報化社会では益々若い力が必要になります。東京同窓会組織もそれに相応しく徐々に変化したいと考えています。

同窓会は大勢集まり食べて飲んでおしゃべりするのが最大の楽しみであります。今年は総会を５月24日(土)に開催します。高層ビルでの開催は初めてです。東京の街並みを見下ろしながら、楽しいひと時を過ごしましょう。

今年5月24日(土)、伝習館東京同窓会総会を開催します！

◆とき＝令和7年5月24日(土曜)11時30分開宴
◆ところ＝サンシャイン60の58階、クル－ズクル－ズ
(JR池袋駅東口徒歩8分、東京メトロ有楽町線東池袋駅2分)
11時受付、11時30分開宴、14時終了。会費1万円予定

※80歳以上(高14回～)には往復はがきで連絡します。
それ以外は各学年幹事を通じて連絡、出欠を取ります。

ゲスト＝金見美佳さん
(高49回、ソプラノ歌手)

OPEN

Webサイトオープンのお知らせ

https://denshukan-tokyodearfriend.org/

このたび、東京同窓会の新たな交流の場としてwebサイトをオープンいたしました！
このWebサイトでは、同窓会の最新情報やイベント案内、過去の活動の記録をお届けするとともに、皆さまとのつながりを深めるためのコンテンツを、少しづつ展開していきます。

会報への投稿待ってます

投稿方法は23ページに後述します。「あの時の場所」や「懐かしい風景」など、短いエピソードでも結構です。今後、webに対応した投稿方法も検討していきます。

【東京同窓会　学年幹事会活動報告】

伝習館関係

・Ｒ５.10月～11月　会報24号最終調整
　会報編集委員
・11/11(土)　伝習館創立２００周年
　記念式典　(柳川　伝習館高校)
・12月　会報24号発行

R6.1/27(土)　学年幹事会　五反田

・名簿整理(逝去・返却・辞退・その他)
・親睦会開催(案内方法・範囲)(会費)
・会報25号以降についての方針
・修学旅行生との交流会について。学年幹事会ＬＩＮＥグループで2月～5月
・親睦会実行委員会…随時開催
　皆さんにお知らせしました。
　5/25(土)　五反田　ニューぼたん
・伝習館東京同窓会親睦会開催

7/20(土)　学年幹事会　田町

・名簿整理
・親睦会(会計報告・総括)
・賛助金(昨年までとの比較・今後の見通し)
・会報25号(1/27より継続協議)
・来年度総会(実行委員選出)
・学年幹事/常任幹事候補選出

10/26(土)　学年幹事会　田町

　7/20に引き続き協議
・総会会場…Ｒ７ 5/24(土)
　池袋サンシャイン６０　58階展望レストラン
　『クルーズ クルーズ』に決定
・会報25号(限定配布)…印刷⇒外注
　発送⇒自分達で手作業
・役員の若返り、会則の改定等を協議

県人会関連

・毎月１回定例会議
・4/20　役員交流会
　　3名参加

柳川市関連

・柳川フェア
・Ｒ6 11/16～11/18
　於・丸の内ＫＩＴＴＥ

【東京同窓会決算報告】

伝習館東京同窓会決算報告 (2023/11/1～2024/10/31)

収入	銀行	92,000	賛助金　10件(親睦会時現金受付含む)		
	:	98	受取利息		
	ゆうちょ	588,000	賛助金　114件		
		89,760	親睦会余剰金		
	当期収入	769,858			
支出	会報発行	918,302	会報24号発行費用一式(発送費用含む)		
	:	14,867	編集委員会資料取り寄せ(特別郵送等)送料		
	電子版	26,400	R5 11月　　R6　10月		
	学年幹事会	1,184	コピー代(学年幹事会3回)		
	R6　親睦会	7,567	返信用ハガキ/着払/コピー代		
	広告費	40,000	伝習館大同窓会(柳川)広告費		
	県人会	21,000	同窓会役員実務者交流会(3名)		
	事務費	10,250	切手・レターパック等		
	:	880	銀行振込手数料		
	:	1,130	郵便振替用紙送料		
	手数料	19,686	郵貯振替口座手数料		
	:	6,490	郵便振替通知手数料		
	印字サービス料	1,720	郵貯振替用紙印字サービス料		
	R7　総会	50,000	R7総会会場予約金　ムーンエレファント		
	:	14,000	:　大井町・池袋　視察/試食(7名)		
	当期支出	1,133,476			
当期損益		△ 363,618			
				銀行	1,000,460
前期繰越		1,665,896		ゆうちょ	257,742
当期損益		△ 363,618		現金	44,076
次期繰越		1,302,278			1,302,278

2024親睦会　特別会計(2024/5/25)

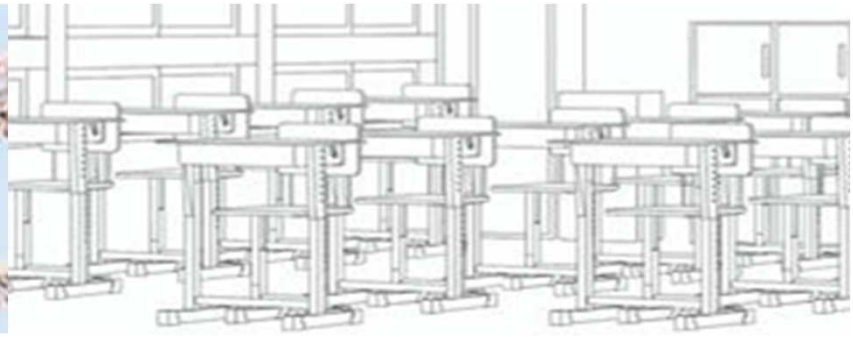
収入	会費	490,000	参加費　@5,000×98名	
	合計	490,000		
支出	会場費	380,240	飲食費　@3,880×98名	
	お礼	20,000		
	合計	400,240		
収支		89,760		一般会計へ繰り入れ
賛助金		8,000	2名	一般会計へ繰り入れ

伝習館東京同窓会学年幹事およびサポーター　令和７年１月現在

卒業年次	氏名	卒業年次	氏名	卒業年次	氏名
第２回（名誉会長）	江崎正直	第28回	吉開孝人	第40回（常任幹事）	山田雅彦
第13回（副会長）	原田万紗子（立花）	第30回	持木浩徳	同上	藤田昌弘
第14回	高木節子（堤）	第32回（常任幹事）	甲斐田幸輝	同上	千釜洋子
第15回	後藤民子	同上（常任幹事）	一木亮之介	同上	石橋美和
同上（副会長）	椛島正司	同上（常任幹事）	大笹健一	第41回（常任幹事）	古賀貴統
同上	水澤昭子（田中）	第33回（常任幹事）	山田公徳	同上（常任幹事）	下河敏彦
第17回	浦川邦憲	同上	山田佐登子	同上	鶴　由希子
同上	福山雅文	第34回	梅崎達也	同上	丸岡さち代
第18回	吉田シズカ	同上	真鍋和裕	同上	松嶋英明
同上	満生英二	同上	大隈光一郎	第42回	弥永邦夫
第19回	芹川季代子（立花）	同上	大津志保	第44回	清原万和
同上	田中茂利	第35回（常任幹事）	池上英次	同上	荒巻和伸
第20回	高巣和登	同上	土井啓郁	第45回	広松千万人
第21回（常任幹事）	西原正道	同上（常任幹事）	山田江里子	同上	中島淑雄
同上（会長）	白谷政則	同上	大野美佐子（山田）	第51回	木村泰輝
同上（編集長）	北島正常	第36回	指田初代（藤木）	第58回	迫浩平
第23回（常任幹事）	樋口貴美子（田上）	同上	猿渡由希子（渡邊）	第63回	佐藤公治
同上（常任幹事）	高田健二	第37回（常任幹事）	志牟田美佐	同上	大坪佳右
第24回	酒見和平	同上	桑山　薫	第65回	吉岡和政
第25回	稗田克彦	第38回	金子千恵美	第66回	池田真由
第27回（常任幹事）	高橋圭介	第39回	高橋　徹	第67回	松尾康平
同上	松藤峯成				

進路状況（令和６年４月）

国公立大学合格者				私立大学合格者			
京都大学	2	宮崎大学	2	明治大学	1	関西外国語大学	1
大阪大学	2	鹿児島大学	8	法政大学	3	京都女子大学	1
九州大学	9	横浜市立大学	1	立教大学	3	産業医科大学	1
佐賀大学医学部医学科	1	大阪公立大学	1	津田塾大学	1	福岡大学	133
北海道教育大学	1	広島市立大学	1	東洋大学	1	西南学院大学	58
奈良女子大学	1	新見公立大学	1	日本大学	1	久留米大学	30
広島大学	5	周南公立大学	1	東京女子大学	1	他合計	410
山口大学	3	北九州市立大学	3	同志社大学	14	公務員合格者	
福岡教育大学	6	福岡女子大学	3	関西学院大学	2	福岡市役所	1
佐賀大学	28	福岡県立大学	1	立命館大学	20	福岡県職員	1
熊本大学	12	長崎県立大学	1	関西大学	2	福岡県警察	1
長崎大学	5	熊本県立大学	1	京都産業大学	2		
大分大学	2	合計	101	近畿大学	7		



【賛助金ご協力状況報告】

令和５年11月1日～令和6年10月31日

10月末日を〆日としました。氏名は←左から順

回生	氏名
協賛50口	
6	川口　鍵寿郎
協賛25口	
21	白谷　政則
協賛10口	
6	戸上　軍治
協賛5口	
32	一木亮之介
4	渡邉　喜亮
6	岡田　哲也
7	大藪　成人
11	樋口　守
12	野上　一治
14	高木　節子
16	椛島　正司
21	北島　正常
27	友清　　寛
32	濱武　久司
33	横山　栄作
33	山田　公徳
35	池上　英次
協賛3口	
8	入部　一郎
17	浦川　邦憲
18	江口　吉光
26	与田　守祐
協賛2.5口	
1	高石　満之
4	荒井健之輔
5	江口　政司
5	酒井　弘子
8	一色　康子
10	松藤　俊正
11	伊東　勝久
12	小野アケミ
12	横山　正和
13	進藤　達実
14	鶴　　保子
15	後藤　民子
16	金子　　修
16	内田　正月
16	松延日出美
17	福山　雅文
17	島添　　徹
18	十時　理展
18	山下　京一
18	満生　英二

回生	氏名
協賛2.5口	
18	松藤　由朗
19	田中　茂利
19	野口　昇
19	福山　啓治
20	岡　　賢二
20	椛島　豊子
20	田渕　　正
21	師村　尚子
21	西原　正道
21	坂井　友実
21	中島　和彦
23	志岐　光穂
23	竹内　幸代
23	末永　龍介
27	高橋　圭介
27	江崎　友大
28	吉開　孝人
31	荒木　亮治
34	真鍋　和裕
35	北原　哲宏
35	石橋　栄市
協賛2口	
8	高石　順子
10	永倉　素子
14	松岡健次郎
24	山田　直美
29	古賀　宣明
30	橋爪　政男
協賛1,5口	
5	安藤　祥介
7	石橋　一徳
8	池田　孝人
10	中村　紀子
11	龍　　勝
12	尾田　常昭
14	井上　晴美
16	水澤　昭子
20	堤　　博史
23	樋口貴美子
25	末永千賀子
26	野口　佳延
協賛1口	
2	石橋　慶孝
3	臼井ヒロエ
5	原　たか子
5	野口　幹彦

回生	氏名
協賛1口	
6	石橋　　修
6	菊次　伸子
6	森　　清旨
8	樋口　誠佑
9	三小田晋二
9	岩丸　純芳
10	高島　早苗
10	大島喜代子
10	古賀雄次郎
11	城島　孝雄
11	原尻　満子
11	吉川　照子
11	木下　淑子
11	久賀　朝文
12	森山五百子
12	甲木　宏明
18	秦　　正子
18	細川　正子
19	正岡　喜則
20	海東　信子
20	諸藤　由美子
20	近藤　敬介
20	井口　ちづ子
21	江崎　和子
21	鎌田　　克子
21	藤木由美子
21	佐藤　邦恵
23	坂本　智臣
23	下田真知子
24	後藤　一誠
24	田中　知子
24	分部三枝子
30	松延三津子
32	咲村あかね
44	清原　万和
49	金見　美佳
協賛0.5口	
8	井上　頼子

伝習館高校東京同窓会 賛助金通信欄コメント

高18　江口吉光
荒井先輩の「へそくり山」を拝読してへそくり山の上でユニフォームに着替え、柳城中学野球部と試合をした時の記憶が懐かしく甦りました。(矢留中学出身)

高17　浦川邦憲
先輩方の昔話がとても楽しく、毎回読ませていただいています。いつもありがとうございます。

高６　戸上軍治
白谷会長、会報誌24号ありがとうございました。北島編集長をはじめ、スタッフの皆様に感謝申し上げます。大先輩の小野様、荒井様をはじめ、若手による多彩な記事も良かった。ありがとう。毎回楽しみにしております。

高５　安藤祥介
お世話様です。いつも有り難うございます。

高12　野上一治
LINEにて皆さんの情報・連絡の往来拝見していますが、老齢者はついていけない今日この頃です。

高８　入部一郎
リハビリに専念しております。また、終活を加速しております。

高７　大藪成人
現在86歳。３年前に妻を亡くし独り暮らしです。近くに二人の娘が住んでいるので心強いです。昭和36年３月に熊本大学工学部電気工学科を卒業し、東芝に入社。定年まで務めました。

高12　森山五百子
毎回、お世話様です。

高10　高島早苗
私たちの学年幹事、内山秀生さん永倉(跡部)素子さんはこの東京同窓会会報の編集に携わってこられました。長年お世話様でした。読み応えがあり、届くのが楽しみでした。ありがとうございました。

高23　下田真知子
いつも楽しみにしています。会報のおかげで懐かしい故郷のことを知ることができました。

高30　松延三津子
今まで会報の送付、有り難うございます。Web 版も楽しみにしています。

高16　椛島正司
時代の変化とチャレンジ。電子版会報に期待しましょう！

高49　金見美佳
会報いつも楽しみにしています。昨年は東京同窓会、伝習館高校創立２００周年記念式典で歌わせていただき、ありがとうございました。またお互い元気にお会いできますように。

高14　高木節子
９月に柳川大同総会に参加しました。昭和38年、インターハイに出場したバレー部の仲間、住田(徳永)静子さん,大塚(川村)カズ子さんとも再会。懇親会会場の御花で立花民雄会長らと共に写真に収まりました。

高５　原たか子
柳川に帰郷する際に三柱神社の欄干橋を散策し、川を眺めますが、年々透明度が落ちていて、残念に思います。

高21　西原正道&北島
10月に独立展が国立新美術館で開催され、同期の池末満君の絵をクラスメイトたちと鑑賞しました。高齢とは思えない筆致で 200号の絵を描き上げた池末君から、一同また大いにパワーをもらいました。

伝習館高校自然科学部の挑戦
～「ニホンウナギの２つのサンクチュアリづくり」から見えてきた持続可能な社会の枠組み～

私たち(1971年度生まれ高校41回生)が高校に入学した1987年、映画「柳川掘割物語」が放映されました。かつてヘドロなどの汚れ等で「七色の川」と呼ばれた日本でも類まれなる水郷が、地域住民の努力によって復活を遂げた物語です。

伝習館高校自然科学部の挑戦は、さらにスケールが大きい。そして、柳川のアイデンティティに強くかかわっています。景色として水をきれいにするだけではなく、地球規模の生態系循環を見据えた取り組みです。

この10年の取り組みはいずれも素晴らしいと思うのですが、あえて個人的にハイライトを挙げるとすれば２つあります。ひとつは、個体識別をするためイラストマー蛍光標識を施したウナギを再捕獲してモニタリングしていること。持続可能と言うのは簡単ですが実践するとなると、大変な努力です。こうして故郷の環境で成長したことが確認されたウナギは、その後、西マリアナ海嶺周辺海域まで産卵のために帰り、そこで一生を終えます。

マリアナ海溝は日本から約3 ,000kmもの距離があり、太平洋プレート縁辺の世界一深い海溝です。高校生達や地域の人達の努力が、竹竿の届く深さの柳川の掘割から実に壮大なドラマを連想させます。

ふたつめは、ニホンウナギの水槽にクスノキの落ち葉を入れると感染症が起こらず死亡率が激減した事実を突き止めて、水源の植生や土壌との循環を分析する活動へつながっていったことです。

木庭先生は本書で上流の 100年の森計画について述べられています。森と岩清水から生まれた河川は、やがて平野を潤し大河の風格を持ち有明海に注ぎます。ふつうはそこで思いを巡らす範囲が終わってしまうものですが、自然科学部の取り組みは。マリアナ海溝という地球規模の環境を着想！

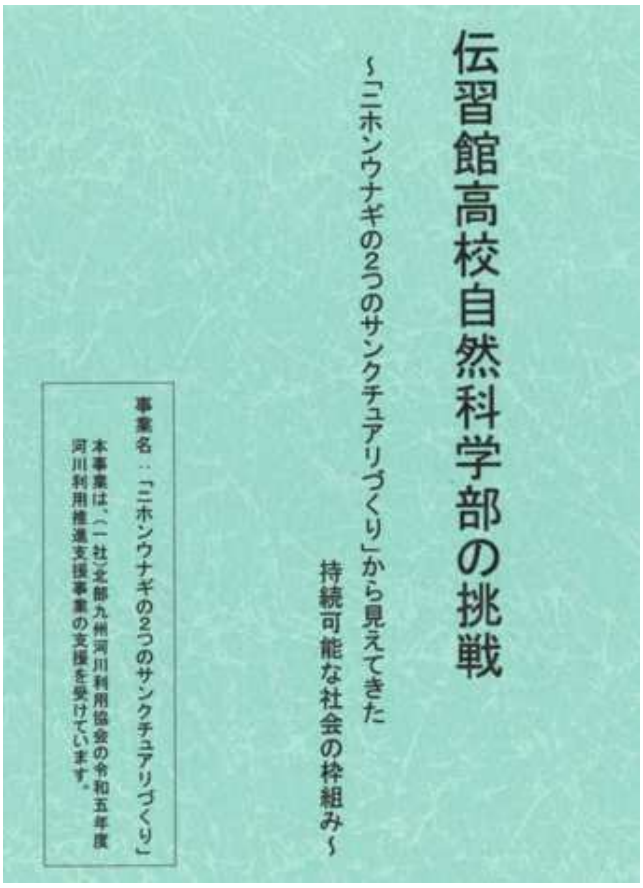
Think Globally Act Locally
「地球規模で考え足元から行動せよ」
にかける青春の汗が大河の一滴になる浪漫があります。

伝習館高校もまた永い歴史を持っています。水と風が土や養分を運ぶように、高校生の汗水と伝習館の校風が夢を運ぶ10年間、そしてこれらも続く高校生の未来、同じ故郷と青春を共にした仲間と語り合う。

本書はそのマイルストーンとして、次世代に引き継がれてほしいと思います。

高校41回生　下河敏彦

絶滅の危機に瀕するウナギを守り、育てたい【自然と向き合うワカモノたち】
https://scienceportal.jst.go.jp/gateway/sciencewindow/20221116_w01/



新制伝習館高校事はじめ（その三）

高4　渡邊喜亮

フランス語との出会い

伝習館高校入学一期生のわれわれは、フランス語にまで手を伸ばしたのであった。実は、ほんの真似事に過ぎなかったのであるが、第二語学まで＜かじった＞という新鮮な喜びがあった。

英語の武田佳二郎先生が東大仏文出身と聞いていたので、山田穣太郎君と話して…２年生の夏休みの間に、「フランス語バ少シ勉強シテミロカ」ということで、一緒に先生にお願いにいった。武田先生は、「自分でなくだれか適当な人を探してみよう」とトントン拍子に話が進んでしまった。

ところが、これが大失敗。フランス語まで一緒にやろうという学友がなかなか集まらないのであった。みんな、大学受験に必要な勉強はやるが、無駄なことはしたくなかったのだと思う。それなのに、後に九大理学部に進んだ純粋理系の山田君が、フランス語に関心を持ったというのは、一面、余裕をもって高校生活を享受する、良い時代の伝習館であったと云えるかもしれない。

かくて、お願いして教わる方が体制不十分。先生には「きみたちが生徒を集めるというから、教師を手配したのに、それじゃあ困るじゃあないか」と大目玉を食らい、すっかり落ち込んでしまった。これはいけない…と二人で相談し、荒井健之輔君や島田善介君たち何人かにも加わってもらい、今度は本気になって勧誘に務めたお蔭で、次の冬休みのあと、２年の終わりの春休みに、何とか十数人の生徒が集まり、無事フランス語講習が実現したのであった。

荒井君は、この会報には度々ユニークな寄稿を続けており皆さんご存知の通りであるが、ほかにも、独自に、音楽に関するエッセイやイタリア旅行記などの労作がかなりの数ある。現在、東京同窓会の最長老学年幹事の一人でもある。

島田君は、往年の大女優、新珠三千代さんやその妹の桂典子さんの従兄弟であり、桂典子さんが白秋青年時代の映画「からたちの花」に出演し、柳川でのロケの時一躍有名になった。撮影の合間に、桂さんが島田君の家を訪れるたび黒山の人盛りであった由。こちらも、空海、信長や立花宗茂等の人物に迫る労作がいくつもある。病を得て入院中であるが、回復を祈っている。

フランス語講師は、武田先生の依頼で、九大の久留米分校から若い先生にきてもらったが、筑後地区のフランス関連の同好会のような集まりの仲間であったらしい。北校舎の教室で、10回にも満たない集中講義であった。

もう今では、そのときのフランス語は、ほとんど忘れてしまったが、講義の最初に教わった幼児の歌だけは、どういうわけか今でも覚えている。

これは、世界に広がった有名な歌のようで、そのうち、みなさんの子や孫たちが歌いだすかもしれない。いや、ひ孫も！

教室では、最初に教わって、毎回、みんなで合唱させられたのだった。

伝習館でのフランス語が縁となって、大学で選択する第二外国語はフランス語にしたが、山内義雄教授という当時仏文学の第一人者に教わるという幸運にめぐまれた。

山内先生は、その頃、大学生必読の書といわれた、デュ・ガールの「チボー家の人々」やアンドレ・ジッド「狭き門」など数々の翻訳で知られ、芸術院賞を受賞、ポール・クローデルとの親交などでも知られる仏文学の大家であった。

本来、早大仏文科の看板教授であったが、故あって、政経学部に転籍され、われわれ１・２年の初級フランス語の担任でもあった。

すでに述べたように、高校時代、社研を始めあれこれ手を広げ過ぎて、読書に熱中、受験勉強が少々おろそかになったこともあり、一年間の浪人時代は一転、猛烈受験勉強づけであったが、最難関への挑戦は失敗に帰した。

そこで、早大政経学部に入学したが、その受験のさいにも、内心では「８科目勉強したのに、このうち３科目だけ選択」という不安が付きまとっていた。

Il é tait un petit navire	（イレテ・タン・プティ・ナビール）
Il é tait un petit navire	（イレテ・タン・プティ・ナビール）
Qui n'avait ja- ja- jamais navigu é	（キ・ナベ・ジャー・ジャー・ジャメ・ナビゲ）
Qui n'avait ja- ja- jamais navigu é	（キ・ナベ・ジャー・ジャー・ジャメ・ナビゲ）
Oh é　Oh é　Oh é　Oh é	（オエ・オエ　オエ・オエ）
ちいさなお船がありました	ちいさなお船がありました
一度も航海しなかった	一度も航海しなかった
エイ、エーイ	エイ、エーイ

因みに、慶応の経済は、数学をいれて４科目だったので比較的楽に受験できたが、当時あまり慶応に行く気はなかった。ただし、４科目というのは、好ましい制度であったと思う。どうも、現在まで尾を引く大学入試制度は、大変革が必要で、負担の大きすぎる国立は４～５教科５科目、少なすぎる私立は３～４教科４科目程度が妥当なところではないか、と余計なことまで考えたりしている。ほんとうは、４科目だ５科目だ、１点差の勝負だ、などというより、欧米のように、推薦入学を含め、もっと多角的で柔軟な選抜が必要かもしれない。

すこし、それてしまったが、大学に入学したものの、教授陣のレベルの低さに絶望し、専ら、錚々たる教授陣を擁した文学部、商学部など他学部の聴講と図書館に入りびたりとなった。

なにしろ、当時、政経学部の学生たちは、こぞって、「学生一流、校舎二流、教師三流」とうそぶいていた時代である。この「一流、二流、三流」の迷フレーズ？は、後後まで新聞、雑誌でも取り上げられるほどであった。

そういう時に、山内先生の時折フランス語をはなれた文学・文芸講話が素晴らしく、蕎麦屋の２階で時折開く先生を囲んでの懇親会がまた待ち遠しかった。（後年、政経学部も著名教授を多数擁し一新された由、蛇足ながら付記しておく）

理系教室の拡充

昭和24年（1949年）、湯川秀樹博士が、素粒子論の分野で、日本人初のノーベル賞（物理学賞）を受賞し、これを契機に、日本全国に物理学ブームが起こった。また、これからは科学・技術立国をめざすべきだという機運が高まり、初等中等教育の場においても理系拡充が進められ、昭和27年（1952年)3月、伝習館にも理科特別教室が新設されることになった。そこで、物理部をはじめ、生物部、化学部それぞれが特別教室の落成記念展示を実施したのであった。

物理部の場合、実験器具類といえば、以前からある古いアンプやスピーカー、真空管、遠心力試験、電磁誘導コイルなどの器具、真空実験装置、放電装置、壊れた偏光板（スリットも？）などがあった程度。ほかに、測量器具やガス発生装置のようなものもあったような気もするが、このあたりは、はっきりしない。とりあえずは、その程度の有り合わせの器具をならべ、折角落成した特別教室の前途を祝す…というデモンストレーションであったと思う。

本来ならば、特別教室を活用して、有り合わせの実験器具で、例えば、電磁誘導や光の干渉・回析など簡単な物理実験くらいはすべきであったが、特別教室と云うドンガラだけが先にできて、まだそのような環境になかったのであった。

しかし、当時の物理部には、気鋭の物理教師吉田重太先生の指導の下、有為の人材が集い、その後、それぞれの道を歩み、社会的貢献をしてきたと思う。特に、新谷弘実君や丸勢正夫君は、物理部出身に恥じず、独立独歩、自分自身の力で道を切り開いてきたのであった。

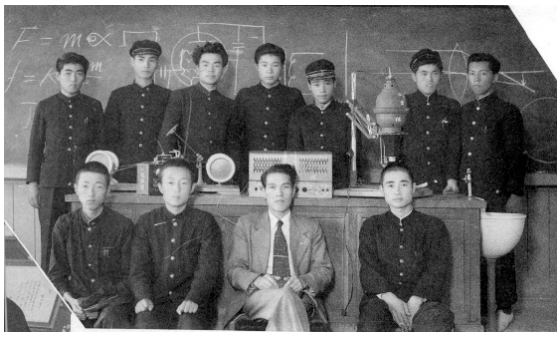
新谷君は、順天堂大医学部を卒業して早い時期に渡米、内視鏡検査の先駆者として日米を往復して評価を高めるに至った。彼の書いた「病気にならない生き方」はベストセラーになり続編、続々編が刊行されるほどの出版界の寵児ともなった。2008年には、伝習館東京同窓会で講演をしている。

丸勢君は、日大工学部から日本電気に入社し、その後、多くの特許を取得して独立、エレメカ」社を設立し、防衛産業の一角を占めるようになっていた。東京同窓会の学年幹事を長く務めていたが、数年前に鬼籍に入ってしまった。

また、当時の物理部は、写真の前列３人がどうも顧問の吉田先生の信任を得て部長、副部長に指名されていたようであった。

まず、向って右、小野硯一郎君は、小野田セメントに入社、幹部技術者として、中国の工場建設にあたるなど国際的にも幅広く活躍していた。退職後は柳川にひきあげ、同期生に呼びかけ懇話会「二八会」を主宰し、毎月開催するなど知的交流を続けてきた。数年前、また東京に戻り、東京同窓会の会員に復し、東京同窓会誌でも度々その健筆を揮っている。

その次の吉田先生の横、筆者の渡邊は、文系という全く別の分野に逸脱してしまったが、後年、いくつかの省庁の研究委員や専門委員を務めたり、国際原子力機関（IAEA）の諮問委員会の委員に指名されるなど、やはり物理の勉強が無駄ではなかったことを知ることになる。また、関連して、原子力発電の経済性やウラン濃縮等に関する何冊かの出版ができたのも、数学だけでなくその後の物理の勉強が根底にある。

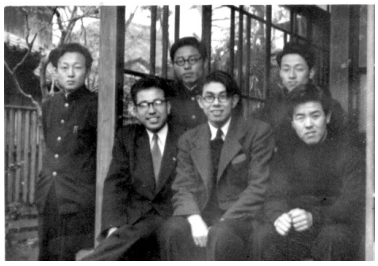


物理部
少数だが精鋭揃い

前列右から
小野、吉田先生、渡邊、十時

後列
山田、新谷ほか

化学部は女性が半数



同期で古沢先生宅に伺う。
左から渡邊、山口(先輩)、
高須、古沢先生、十時、荒井

その次の十時東生君は、物理学ならぬ確率論、推計学や多変量解析など、早くから、数学の分野で名を挙げ、若くして、京都大学助教授となり、その後、広島大学の教授に就任。その間、デンマークのコペンハーゲン大学で研究を重ねるなど最先端の道を歩んでいたが、残念ながら病を得て亡くなってしまった。その数年前、広島のとあるビル最上階の割烹店で、広島の銘酒を酌みながら彼の数学談義に耳を傾けたことを懐かしく思い出す。なお、十時君は、その突出した数学的才能を発揮して、難解至極といわれる「エルゴード理論」なるものの先駆者として、いまだに復刊されるほどの著書を残している。

実は、十時君と渡邊の二人は、高校時代、同期の堤隆晴君の長兄で、伝習館きっての数学・物理の秀才と謳われた２学年上の堤正義さんに、夏休みの間に、物理の特別補習を受けるという有難い恩恵に与った。東大・理一の学生で、厳しくも、理路整然と講義されるのと、時折聞かされる東京での学生生活のあれこれを羨望の面持ちで聞き入ったのであった。あとで述べるように、そのころは、伝習館には、尊敬すべき先輩たちが何人もいて、じつに良い時代であったと思う。

生物部も化学部も同じようなもので、物理部同様、特別教室落成のデモンストレーションで有り合わせの機材を使って、展示会らしきイベントを開催した。

生物部は、嘗ての柳河ニビシ醤油の御曹司、田中潤二君などが中心となっていたようである。同君は立教大学在学中、東京同窓会には毎回出席していたそうで、卒業後は、都内の食品会社に勤務していたが、その後、柳川に戻って久しい。

化学部は、戦後の最重要基幹産業として、所謂「傾斜生産方式」の対象であった石炭事業に職を得、後年経営陣に名を連ねた椛島啓之君や、現在もつくば市で地域活動の責任者として健在の今村啓爾君などが在籍していた。

師・先輩・同期の絆

伝習館に学んだということで、在学中はもとより卒業後も、先生や先輩たちから受けた恩恵は数知れない。そのなかでも、古沢芳吉、平出悦一先生をはじめ、前に述べた**廣松**、**白井**、**宮川**ほか、**横山二三男**、**山口克己**、**目良浩一**その他の先輩たちには、大学時代や卒業後もとりわけ数々のお世話になってきた。

このような「伝習館との絆」について、心からの感謝をこめて、いくつかのエピソードを書いておきたい。先ず、師影寸描から始めよう。

≪師影寸描≫

伝習館には新制高校発足時に入学したことから、旧伝習館中学と柳河高女時代からの双方の先生たちに教育を受けた。新制中学時代とは違って、それぞれ個性的で、面白い天衣無縫の先生も多かった。何人かの先生について述べた中村信人君の軽妙な寸描があるので、紹介しておく(一部省略し加筆)。

・井上勇先生(国語)

生徒として教えを受けている時は大変なお年寄りだと思い、同僚として机をならべている時はお若いなと思い、退職された後は、いったい幾つになられたのであろうかと首をかしげた。それは、あの有名なあだ名の由来ともなった重箱型の容貌がお変わりなかったこともあるが、それよりも、ものの見方、考え方が非常に柔軟で、進取の気性に富んでおられたことによると思われる。

・平川吉一先生（数学）

教え方に関して先生の右に出る者はいなかった。『ケーンカコツモワカランカネ。ホウラ、プラース、マイナス、プラース、マイナスタイ』。名調子の教え方はまさに名人芸であった。退職後勤められた予備校でも「きっちゃん」の講座というと、教室から生徒があふれる人気講師であられたそうだ。

・広松武夫先生（数学）

碁で俺に勝ったら数学は５バヤロウタイ』などとおっしゃる。あだ名は「はぜくち」。情の人である。佃町から歩いて通勤される先生に、私達より３期上の先輩方が卒業記念に自転車を贈った。その話を１年生の私たちにされながら「うッ」と声を詰まらせ、ハンカチで瞼を押さえられた先生の姿は忘れられない。

・古沢芳吉先生（日本史）

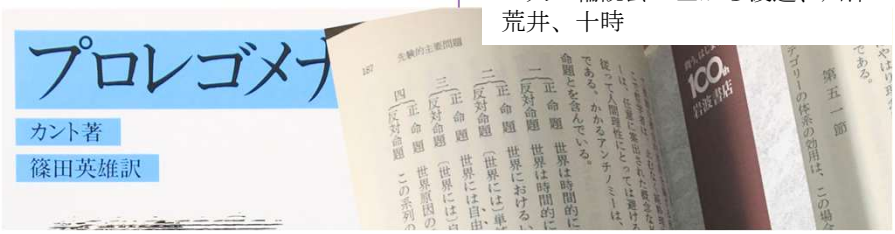
キリンのような長身痩躯を乗り出すように前に傾けて、大声で話される。それは痛烈な社会批判であったり、学生時代の回想であったり、新刊書の書評であったり…この５分間で生徒の心をピタリと掴んでしまわれる。能弁ではないのだが、いま考えても心にくいばかりの授業をさ

れた。
・平出悦一先生（英語）
　まだ独身で椿原町の下宿先に勉強と称して遊びに行く級友が絶えなかった。三教師の処分問題で伝習館が揺れたとき、生徒部長として事に当たられた先生の血を吐くようなご苦労は、副部長としてそばにいた私が一番知っている。退職後は福岡の短大で教壇に立っておられた。
・中村英先生（英語）
　戦争で婚約者を亡くされたために生涯独身を過ごされたという悲恋物語と、あの二食分もある大きな弁当の釣り合わなかったこと。飾り気のない人柄は、年齢を超えて教え子に人気があった。
・中島時夫先生（体育）
　「おやじ」と云えば、伝習館出身者のみならず、全国のバレー関係者には広く知られた存在。面倒見の良さでは定評があり、お世話になった卒業生も随分いるはず。それにしても、昔はこわかったなあ！
・松尾キヌ子先生（体育）
「北校舎に、バサラカ美人の先生がオラスゲナ。水泳ガ専門ゲナ」と云う話を聞いて、南校舎から北校舎のプールまで、わざわざ水着姿を見に行った悪童連がいた。

≪プロレゴメナ≫
廣松、目良先輩及び同期生との思い出

「プロレゴメナ」と聞いても、チンプンカンプン、何ノコトジャロカ、と思うかたが殆どであろう。
　これは哲学者カントの著作「純粋理性批判」があまりにも難解で大学生はもとより専門家にも理解されなかったので、著者自身がわかりやすく核心を解説した序説、いわば入門書ということになっている。
　ところがこの入門書がまた難解で、伝習館時代、天野貞祐か桑木厳翼どちらの訳だったか、一度手に取ってみて、途中で投げ出してしまった経験がある。殆ど理解できなかったのである。（最近の訳本はいくらかわかりやすくなっている）
　その後、大学生になって、一学年上だった**目良浩一**さんから、『学期休みに、廣松を中心とするプロレゴメナ読書会をやることになったから、渡邊君も入ったらどうだ』と連絡があり、即座に参加をお願いした。荒井君に話したら参加したいと云うので、再度お願いして二人で参加することになった。下級生あこがれのマドンナ江崎緑さんや万年堂の長岡さんなども参加されていたと思う。
　大学でカントを学んでいた廣松さんの立て板に水を流すような説明を拝聴しながらも、やはり理解が難しかった。難しいながらも楽しく毎回出席した。
　ついでに書き加えておくと、目良さんには私が上京して大学受験の時も東京駅まで迎えに来て、その足で受験する東大まで案内してもらったこと、それに、新宿にあった渋谷食堂でごちそうになった焼きそばのことなど未だに記憶に残っている。いわば大衆食堂に近いような感じなのに、柳川あたりでは食べたこともないような焼きそばで、上京したばかりの田舎者には驚くほどの美味であった。
　翌年、友人が受験で上京の折、私も同じように渋谷食堂に案内したが、感激した、あれが忘れられないと、後になって、私と同様の感想を述べていた。
　目良さんはあまり知られていないようであるが、東大建築科卒業後、ハーバード大に留学し、世界銀行に勤務。その後、国内シンクタンクの主任研究員を経て、筑波大学教授に就任。次いで、再度世銀勤務ののち米国南カリフォルニア大学教授となり、米国における韓国の慰安婦少女像の撤去運動などを主導し、韓国の誤った歴史観に敢然と立ち向かった畏敬すべき先輩であった。
　風の便りに数年前亡くなったと知り、ただただ、ご冥福を祈るばかりであった。
　また、同じ東大理一に在学していた本木さんと目良さんに、何かのイベントに連れ出された帰り、先輩二人の伝習館同期だった女性Ｅさんの杉並にある女子大寮に押し掛けるというので、お供したのも今は昔の物語となってしまった。
　プロレゴメナに戻って、この本には、さらにその後、伝習館同級生４人で再度、挑戦したのであった。
　廣松渉さんの読書会に参加した次の年の夏休みに、読書会に共に参加した荒井健之輔、物理で一緒の十時東生、それに、伝習館社研時代の盟友川津嵩の九大組３人と早大渡邊を加え、４人の大学生による輪読会を続けたのであった。

4 人の輪読会…左から渡邊、川津
荒井、十時



その時、ソ連大使館から大幅な廉価で提供されたスターリン著、英語版の「レーニン主義の諸問題」を４冊手にいれ、皆で、息抜きにこれも併せ読んでみた。

ナンだ！スターリンだ、レーニンだと？バカにされるかもしれない。今や、歴史的に断罪されたかに見えるが、当時は、学界も、戦後の「マルクス経済」全盛の尾を引いており、反スターリンの新左翼にしても、このソ連の革命指導者は議論の対象そのものなのである。また、たとえそのシンパでなくても、当時の学生が関心を持つ充分な環境にあったのである。

４人のプロレゴメナ輪読会は、ひと夏で終わったが、何しろ、「プロレゴメナ＝序論」と云いながら、難解至極で、結局、中途までしかできなかった。

後は、「ア・プリオリ」、「先験的」とか「超越的自意識」あるいは「悟性と理性」などというようなペダンティックな言辞を弄して、大学の友人たちをケムに巻くくらいが関の山であった。

≪アサヒ・イブニング・ニュース≫
横山先輩との絆

【ほんとに、古い話になりますが、大学に入って半年も経たないころのことです。

まだ米軍に接収されていた新橋第一ホテルの近くにアサヒ・イブニング・ニュースの本社がありました。先輩（註・伝習館一学年上の白谷陽一郎先輩のこと）に連れられて訪ねた日、社のなかには、雑然としながらも、ガード下とは思えないハイカラで、洒落た雰囲気が漂っています。これに惹かれて出入りするうち、ホテルのすぐ側で、時折、日米の男女がテニスに興ずる姿を見かけるようになりました。アサヒ・イブニングの社員とアメリカの軍人や家族達との交流の場面でしたが、当時の沈鬱で反米的状況のなかで、目を見張る華やかな、シネマのような光景でした。

ある日、先輩を通じ、どうだ、米軍キャンプで Asahi Evening News紙の拡販をやってみないか、と口がかかり、これがわたしの珍奇なアルバイトの始まりでした。顔写真の入ったパス（立ち入許可証）を支給され、各地の米軍キャンプを廻ることになったのです。…】

これは、20年ほど前、同期会誌「悠悠」に私が書いた記事であるが、英語を自在に操り、颯爽とアメリカ人とテニスを楽しんでいたのが、アサヒイブニングニュース社の横山さんであり、そのお蔭でこのアルバイトを始めたのであった。

実は、この時の横山さんが、東京同窓会会報に、軽妙洒脱な記事を連載されていたあの横山二三男先輩とは思いもよらず、東京同窓会でも、ついお礼も言上せず大変失礼なことをした、と反省この上もない。だいぶ前に逝去されたと聞き、ただただ申し訳ない気持ちでいっぱいである。横山先輩には、このアルバイトを通じ、ホントにお世話になった。

恐縮ながら、今少し、この20歳の体験記を続けて引用させていただく。

【最初は、成増にあったグラントハイツでした。

見本の英字紙を持って、社を出ると、あとはもうひとりです。

はじめて米軍キャンプに入ってみて、そこに広がる別世界がまず驚きでした。星条旗のはためくなか、見渡す限りグリーンの芝生の上に、カラフルなハウスが無数に立ち並び、遥か遠くまで続いている。これがアメリカだ、となぜか感動したことを覚えています。

その後、セールスの範囲が広がり、原宿のワシントンハイツや神奈川のグリーンハイツ、横浜のグランドホテルにも足を運びました。グランドホテルでは、軍人の夫が韓国駐留で不在の家庭が多く、真夏とはいえ、若い奥さん達が申し合わせたように、なまめかしい水着やショートパンツで出てくるのには、当時のこととて、目のやり場を失った記憶があります。】

この最初のアルバイト先、グラントハイツは、現在の練馬区光が丘の一帯であり、日比谷公園の10倍以上という広大な治外法権のエリアであった。フェンスに囲われた off-limits （立ち入り禁止）のまさに外国であり、数千戸の米軍ハウスに映画館、図書館、教会、集会所、飲食店、売店等が散在していた。

現在、代々木公園やＮＨＫなどがある代々木の一帯には、ワシントンハイツがあり、米軍人の兵舎や家族用宿舎が千戸くらいあったと思う。ここは、しばらく経って返還され、前の東京オリンピックの選手村となった所である。

横浜の山下公園も、米軍宿舎が立ち並び、日本人立ち入り禁止の地域で、虚しい気持ちで出入りしたことを思い出す。

その近くのグランドホテルは、最初に、マッカーサーが日本に進駐して宿泊したホテルで、その後、将校用施設として接収された。ほかのところでは、多くの場合、奥さんは、夫に相談してから…などと断る口実にするのだが、ここでは上記の様に夫が韓国駐留で不在のせいか、即断で購読のサインをしてくれるところが幾つもあった。

一部契約を取ると、アサヒ・イブニング社から 120円の報奨金がもらえて、英会話の実地訓練をかねて、うまくいけば、ずいぶんと身入りの多いアルバイトであった。はっきりは覚えていないが、その頃、大学の学食が20円から30円、朝日、毎日など新聞購読料が月 300円前後であった。何部か契約を取れば交

通費を差し引いても結構な金額になった。

今思うと、アメリカの軍人家庭は、ほとんどが、軍の機関紙のような「Stars and Stripes」（星条旗）は読んでいたが、毛色の変わった日本の英字夕刊紙にも意外に興味を持ってくれたように思う。

それに、いささか変わったアルバイトだったので、面白いことも多く、日本の大学生が珍しいのか家に入れてくれ、まだ一般には出回っていなかったコカコーラという飲み物にはじめてお目にかかったこと、またあるときには、奥さんに、陶器のどんぶりイッパイの赤いアイスクリームをご馳走になり、後年、ストロベリーアイスクリームだったのだと気が付いたこともあった。

麻布かその近くに通信関係の寮があって、独身女子寮とは知らず、夕刻、飛び込みで入ったら、女だけの、もうどんちゃん騒ぎをやっていた。なんだなんだとぞろぞろ出てきた女たちに、用件を言うと面白がって、中にはいれはいれという。どうも怪しげな雰囲気におそれをなして、急ぎ逃げ帰ったこともあった。

そのうち、２年の夏休みに、横山さんに、「九州で拡販をやるように、すべて朝日新聞の福岡総局に話しておくから」と言うことで、

【……私は、本村正治君（当時九大医学部在学中）を誘い、ふたりで「板付ベースキャンプ」や「春日原キャンプ」で、真夏の暑い日々を駆け回ったのです。……それが面白い、珍しい、というので、朝日新聞の社内報に私の体験記が掲載されたのが右の記事です。それで今度は、朝日新聞の柳川通信局の秋吉記者（しばらくして、東京本社に異動）がふたりの対談を企画して本村君と対談したのが、次のページの新聞記事になりました。（これは省略）ちょうど20歳、当時としては、ホントに珍しい得がたい経験でした。】

（この朝日新聞の二人の対談がその直後、アサヒイブニング紙に英語で転載されたのは驚きであった。）

米軍キャンプ
拡張しある記

女の兵隊を男と早合点

渡辺喜亮君と白谷陽一郎君はともに早大学生であるが、ことしの夏休アルバイトとしてアサヒ・イブニング・ニューズをアメリカ軍キャンプに拡張してまわった。以下は、渡辺君の体験記である。——

渡辺喜亮

アイム・フロム・アサヒ・イブニング・ニューズ・プレス・カンパニー。これは僕のアルバイトにはなくてはならない前口上である。そしてこれを一日何十回となく繰り返して来た。

福岡から電車で二十分。春日原で降りると板付空軍基地のキャンプがある。これぞわが目指す職場、しかし数年前問題となった治外法権の地域でもある。ここでアサヒ・イブニングの拡張をやること、これがわれわれのアルバイトなのである。

アルバイトの第一日、短かく刈つた緑の芝生の上を不安な気持で歩きながら、最初のハウスの前に立つ。一息吸つてベルを押す。トキメク胸をおさえながらもう一息つく。ドアがあく。ドキリとしながらも…すかさず「グッド・イブニング・サー」。ところがこれが大変なまちがい。出てきたのは男ではなく何と女の兵隊である。独身ハウスと聞いて男と早合点したのがいけなかつた。レディに対して〝サー〟とは失礼などギマギしながら、お定まりの「アイム・フロム……」続けて「ウイル…ウッジユー・マインド・テイキング……」と何か気に障つたか、「アイ・ドン・ウオント」（いらない）とツツケンドンの返事。まずいと思うちに「ドーン」ドアをしめる音である。仕方なく次に向う。

一体にアメリカ人はくどくどと色々なことを尋ねたりはしない。安いとか面白いとか思えばすぐO・Kと取つてくれる。同様に、いやならはつきり「ノー」である。ところが男は多くの場合、自分でイエス、ノーを定めるのだが女の方は夫に相談するのが通例である。断わられ続けのとき、「アイ・ドン・ウエス」の返事を聞くと、本当に心から感謝したい気持になる。こういうことを繰り返して一日が終る。

「君、よいアルバイトがあるが、やつてみないかい」と同じ早大の先輩にいわれて、英会話を少しでもうまくなりたいと思つていた矢先、それに下宿生活のゲルピンを解消すべく、一石二鳥、欣喜雀躍して飛びついたのである。しかし相手はアメリカ人。メッタな英語では話にならぬ。日本の英語教育の欠陥を充分過ぎるほど受けてきた僕は、ことスピーキング・ヒアリングに関する限り皆目駄目である。だが、「ええ、ままよ」興味と心臓でつつ走つてきたが、この美しい土地が日本であつて、日本に非ざるイマイマしさとヒガミから「われながら馬鹿げたことを……」と思つたりすることもあるが、そこは普通と違つたアルバイト。やり甲斐も、面白さもある。

たまには家の中に入れてコーヒーを飲ませてくれる親切な兵隊、自分の横写した浮世絵を鑑賞させる愉快なのもいる。コカコラを飲まされたこともある。「アイ・ベッグ・ユア・パードン」ばかりいう僕にもあきず話しをしてくれた奥さんもいた。ところがその奥さんたるや、自分の夫を「アノヒト、クルクルパーネ」というのには驚いた。日本の尖端的な新語がここまで進出していようとは。日本人の奥さんをメイドと間違えた失敗などは数知れぬほどだ。

渡辺喜亮（柳川市出身伝習館高校卒　早大政経二年　二十才）

春日原キャンプで渡辺喜亮君の勧誘ぶり

柳川通信局の秋吉記者には、朝日新聞の試験を受けるとき挨拶にいったら、週刊朝日の記者として取材に大忙しであったが、時間を取ってあれこれ話を聞かせてもらった。その年、一緒に受験した大学のクラスの親友、轡田（くつわだ）隆史は合格、私は不合格で、またしても挫折を味わうことになった。轡田は、事情があって、朝日新聞社には、翌年、政経学部一年下の、のちにマスコミ界で盛名を馳せた筑紫哲也と一緒に入社したが、轡田も、海外特派員や論説委員として健筆を揮った。テレビ朝日の最初の「世界は今」のＭＣを何年間か続け、あとに「ニュースステーション」などのコメンテーターとしても度々テレビ出演していた。本も30冊近く出しており、話がうまいので各地の講演もよく依頼されていた。

「渡邊の頼みなら講演料は要らないぞ」と云うので、謝礼捻出に苦労していると聞き、当時の会長、副会長に話して、東京同窓会の講演者に推薦していたのだが、実現しなかった。

（2022年11月記、24年6月補）

グラントハイツ入り口（写真上）と米軍宿舎（写真下）

柳川の夏の思い出

高4　荒井健之輔

柳川の夏は昔も暑かった。おまけに掘割の多い筑後地方特有の湿度が高く、蒸し暑い。私たちが子供の頃はエアコンや冷蔵庫などという優れものがあるわけがなく、扇風機のある家も少なかった。専ら団扇の時代だった。昼間はその暑さに耐えるしかない。陽が落ちて夕方になると家の中もまだ暑いので、時には家の前にバンコを出して夕涼みをする。当時車の通行量がそれほど多くなかったので、バンコを出すことができた。大きめのバンコでは浴衣の子供が寝転がったりしていた。勿論、団扇片手にぱたぱた蚊を追いながらだった。「アツーシテ、ノサン、ノサン」が合言葉だった。（バンコとは縁台・涼み台のこと、ポルトガル語の転用）

柳川の夏で忘れられないものがいくつかある。第１に蚊である。

1）蚊

柳川の蚊は凄かった。最近の人は理解できないのではなかろうか。うだるような昼の暑さだが、夕方陽が落ちると少しは凌ぎ易くなる。それでも家の中は熱気が籠って、むせかえっているので縁側や表に出したバンコで夕涼みをする。バンコでも団扇は体に風を送ることよりも専ら蚊を追うのに忙しかった。無数の蚊が執拗に絶えず攻めてくるのだった。家の裏手の物置のあたりに行くと、「ウオーン」という蚊の羽音が聞こえてくる。手を振り回すと蚊に当たる。それもぱたぱたと当たる。柳川の夏は蚊との戦いの日々だった。戦時中の防火用水の水槽がまだあちこちに残っていて蚊が湧いていた。下水道が整備されない時代に蚊の湧くところはいくらでもあった。蚊帳や蚊取線香は勿論必需品だった。田んぼの畦や堀端に沢山生えているよもぎを、蚊を追うのに効き目があるというので、沢山取ってきて乾燥させたものを、夕方大きな火鉢のなかに入れて燻すこともよくやった。夏は暑くて縁側の雨戸など閉めたことはなかった。「ドロボウガキタッチャ、ナーンデンモッテイクモンハ、ナカモンナ」とか言いながら。強い風が吹くと部屋の蚊帳が吹き上がる。夕立の時は慌てて雨戸を閉めた。

伝習館の野球部にいた頃、夏の全国大会（甲子園）の出場を目指した、炎天下の猛練習の日々を忘れない。夢ではなく達成可能性の大きな、手の届くところにある目標だったから練習にも力が入った。体がなまるからと水を飲ませてくれない監督もいたけど、汗まみれで耐えて練習に励んだ。くたくたになった。

県予選の前に泊まり込みの合宿をやった。宿泊の場所は南校舎（旧女学校）の作法室で、まだ残っていて校舎の北側にあった。作法室の南側の縁先には池があって、そこがボーフラの湧く蚊の一大生産地となっていた。その蚊の物凄かったこと、今でも忘れられない。猛練習でくたくたに疲れ、風呂で汗を流し、暑くて裸になっている我々若者たちに、血に飢えた蚊たちが、一斉に襲いかかるのだった。部屋の襖には蚊たちが止まっているが、まるでゴマ粒を投げたかのように止まっている。私はそれまでこれほど沢山の蚊が止まっているのを見たことがなかった。恐ろしいほどの蚊だった。裸なんかではおれなかった。シャツを着ても皆団扇でぱたぱたやっている。慌てて蚊帳を吊って逃げ込んだ。それでも蚊帳の中にも蚊は入り込んできた。野球部の合宿のことでは蚊のことしか思い浮かばない。

今、埼玉に住んでいるが、私にとっては蚊はいないのも同然である。家内や娘たちは、たまに蚊が「ブーン」と飛んでくると「蚊がいる、蚊だ蚊だ」と大騒ぎするが、私にするといないのに等しい。家内は時々刺されるらしい。ベッドの下にベープを置いている。私は刺されたことはない。

2）ワシワシ（熊蝉）

「にいにい蝉」を初めとしていろんな蝉がいたが、忘れられない蝉「ワシワシ」である。子供の頃、漫画を見ていて、蝉の出てくる場面では鳴き声は必ず「ミーンミーン」だった。何となく不思議に感じた。東京には「ワシワシ」はいないのだろうかとも思った。2024年８月24日の朝日新聞be版の東海林さだおさんの「あれも食いたい、これも食いたい」の中に「夏といえば入道雲、蝉がミンミン、海水浴、花火大会、西瓜・・」という文があった。我々にとって蝉の声とはまず「ワシワシ」なのであった。夏の盛りの風が止まったような暑い昼間、「ワシワシ」の一大合唱が始まる。城内小学校の数本の大きな梅檀の木には沢山止まっていた。昼間その合唱が止むことはない。うだる暑さがいや増すといった感じだった。一斉に鳴くときは人と会話ができないほどだった。大声を出さないといけなかった。「にいにい蝉、つくつく法師、あぶらぜみ」などの鳴き声はか細い弱々しい。

「ワシワシ」の鳴き声はすさまじい、力強い。そしてうるさい、実にうるさい。ノサン。会社にはいって、大阪や広島に住んだが、どちらにも「ワシワシ」はいたが、熊蟬と言った。やはりうるさかった。東京や関東に来てみると、「ワシワシ」の鳴き声が聞こえてこない。時々「ミーンミーン」なのである。日本のどこかを境にして東日本にはいないようである。関東以北か。「ワシワシ」の鳴き声で暑さをかきたてられることもなく、午睡を妨げられることもない。つくつく法師が鳴く頃は暑い夏も終わりに近く、陽ざしもやや弱めになり、秋の到来を感じさせられる。「ワシワシ」はうるさいけどナツカシカ。

3）祭り

(1)水天宮（初夏の祭り−沖端）

５月は沖端の「水天宮さん」があった。御花の前を過ぎて沖端にはいる。その先で堀をはさんで両側に道が伸びているが、右の道の先に「水天宮さん」が鎮座しておられる。「水天宮さん」の祭りで人気だったのが舟舞台だった。道路に挟まれた堀の上に浮かべた舟の上に舞台を設（しつら）えて、そこで演劇や歌謡ショウが催された。舟舞台は堀の上を上下に移動するので観客もぞろぞろと付いて動いていた。

水天宮で忘れていけないのは「串だんご」である。我々は「串だご」と言った。舟舞台よりも「串だご」だった。漉(こ)し餡でくるんだだんごが串に３・４個刺してある。美味かった。

伝習館の頃、盲腸で入院中の中村信人をおいて、木原繁幸と水天宮さんに出かけた。お参りもそこそこに舟舞台を横目に戻ってきた。御花の向かいには「黒田菓子舗」がある。ここの「串だご」は美味かった。そこを通りかかると黒田の多鶴子さんが「串だご」の包を持って飛び出してきた。「こんばんは」と言うと、「信人さんのお見舞いに、どうぞ」と言う。「そりゃありがとう」と受け取った。御花の前から岡田さんの家の方に曲がったら、早速包を開けて２人で食べ始めた。美味い。「木原、コレハヌシニクレタツゾ。見舞イトカイウトッタバッテン、アリャスラゴツ。盲腸ノノブトガコゲンカモンクエルワケナカ」と言いながら、食べに食べた。その頃多鶴子さんは木原にホの字だった。そのあと中村を病院に見舞い事の顛末を話しながら大いに笑ったのであった。（３人とも故人で名前を出しました）「越山」でも「串だご」を売っている。だごは少し太めだが、一串に２個しかついていない。何となくさびしい。しかし美味い。

(2) とんとこ町の天満宮（北面天満宮）

出来町を我々は「とんとこまち」と言った。祭りばやしが「とんとことんとこ」と聞こえたからなのであろうか。城内小学校の運動場の門のの前の細い道を東に進むと、柳川を代表する風景の一つで、煉瓦づくりの味噌蔵の見える団平橋（だんびらばし）がある。橋を渡って吉開味噌屋の角を左に曲がる。突き当たりの長命寺原（ちょうめじばる）を右にとって、100 メートル強程歩くと天満宮の前である。柳川の街から行くと、京町と細工町の交差点から南に真っ直ぐ一本道で突き当たりにある。子供の頃の夏の遊びの定番だった花火を買って貰うのが、とんとこ町の天満宮の夏祭りだったのである。

(3) 祇園さん（八剣神社）

正式には「八剣神社」なのだろうが、我々は「祇園さん」と呼んだ。京都のそれと一緒である。神社の裏が柳川小学校だった。運動場は境内だったのかもしれない。中町から平野屋旅館の横を東に入ると突き当たりに神社があった。ここも夏の花火を買って貰う決まりの祭り、場所だった。新制中学がスタートして野球部が出来てもグラウンドがないので、ここの運動場でよく練習をした。おそらく小学生達は迷惑に思っていたであろう。申し訳ない。

4) 泳ぎ

夏は暑い、水に浸かりたくなる、泳ぎたくなる。柳川の泳ぎは川泳ぎである。堀泳ぎなのかもしれない。子供の頃プールがあるのは伝習館と女学校だけだった。小学校にプールはなかった。川泳ぎが当たり前だった。子供たちだけで泳ぎに行った。大人が付いてくることなどなかった。泳ぎと川遊びを兼ねたようにして出かける。泳ぎの場所は主に高門橋や宮永橋で、網を持って出かける。人が泳いでいなくて流れがゆるやかな時には、手長海老がコンクリートの壁に止まっていたりする。そっと網をかぶせてすくいあげる。泳ぎが始まると海老はいなくなるので後は専ら泳ぎまくる。岸の菰のあたりを子供の群れをひき連れた大きな台湾どじょうが泳いでいたりした。川には時々ひる（蛭）が泳いでいて吸い付かれ困った。宮永橋の先の水門（井樋＝いび）のあるところでは、泳ぎが禁じられていたが、時々泳いだ。深くて流れがなくて泳ぎやすいのだ。ここには田に水を揚げる灌水機があって灌水路がある。水路には小鮒やはえ（はや）や泥鰌などが上がっていて、これを捕らえるのも面白かった。

高門橋ではすぐ近くの岸に大きな椋の木があって枝が水面近くまで伸びていた。そこで木に登って枝伝いに水面近くまで来て堀に飛び降りることもした。遊び疲れると橋の欄干に腰掛けて甲羅干しをした。当時車の通行量は多くなかった。

伝習館のプールに泳ぎにいくことはなかったが、女学校のプールには忍び込んで泳いだことがある。伝習館は水泳の強豪で水泳が盛んだったが、女学校のプールは閑散としていた。

伝習館に入学して野球部に入ったら、肩を冷やしたら駄目だというので、水泳は禁止となった。それで水泳は上達しなかった。

２年末で野球部を辞めたので、３年生の夏休みに中村・木原と連れ立って、船小屋へ泳ぎに出かけた。勿論、自転車で出かけた。瀬高から矢部川の土手の上を行く。朝鮮松原を通り過ぎて、船小屋の国道の鉄橋の少し上流の、川幅の広いところに水泳場があった。しばらく泳いだ後飛び込み台に上ってみた。杉板を斜めに水面に突き出したような飛び込み台があった。先端に立つと上下に揺れる。飛び込もうと踏ん張ったら板がビュンと跳ねて真っ逆さまに水面に突っ込んだ。慌てて水面に上がろうと体を反らせたら背筋にピッと痛みが走った。しばらく泳いでいて、中村と木原に話したら早く帰ろうということになった。帰宅して父に話したら、すぐ接骨院に連れて行ってくれた。背骨が少しずれているという見立てで、しばらくは激しい運動は控えるようにとのことだった。結局秋の運動会は休むことになった。

5) 夏の食べ物

(1) アイスケーキ・アイスキャンディ

子供の頃、自転車の荷台に四角のアイスボックスを載せて、旗を立ててチリンチリンと鐘を鳴らしながら、アイスケーキ売りが回ってきた。ケーキとキャンディの違いはわからない。丸か四角のアイスに串のついた棒型だった。アイスケーキを食べるのは嬉しかった。美味しかった。しかし何時も買えるものでもなかった。当時アイスケーキを作る店はいくつもあった。老舗の「越山」も作っていた。昔の店の右手にアイスケーキ製造の作業場があって、クンクンと音を立てて機械が動いていた。柳城中学の野球部の頃、仲間で図って、乏しい部費を補うため、伝習館のグラウンドで野球の試合がある時、アイスケーキ売りをした。当時高等学校の試合のほか実業団の試合もよく行われていた。仕入れは「越山」だ

った。アイスボックスも借りて、自転車に載せて伝習館のグラウンドに運んで行って、旗を立ててチリンチリンとやった。何度かやった。売れて部活動の足しになってバットやボールなどを買えた。誰にも許可をとらずにやった。勝手にやったのだがそんな時代だったのだろう。

(2)かち割

家族が多いのでいつもアイスケーキを買うわけにもいかない。そこで時々大きな塊の氷を買ってきて、錐で砕いて器に入れてスプーンで食べる。これを「かち割り」と言った。かき氷なら嬉しいが、砕いた氷は長持ちする。そして白砂糖があれば言うことはない。経済的に安く沢山口にできるので、我が家の夏の定番になった。夏の暑さを暫くは忘れることができた。

(3)菱売り

夏の夕方「ひっしゃんおうー」と声を上げて、菱売りが回ってきた。夏の風物詩である。時々買って皆で食べた。包丁で２つに切って実を食べる。実は栗に似た食感でやや透明感があったと思う。最近の菱の実は大きいが、昔柳川で食べたのは小ぶりだった。腹の足しになるほどのものではないが、季節を感じるものであった。

(4)かしうり（菓子瓜＝真桑瓜）

夏の果物と言えば、「西瓜」・「梨」・「かしうり」・「ぶどう」くらいだったのではなかろうか。甘い瓜ということで「かしうり」と言ったのであろう。「かしうり」は我が家の畑で作ることができる。安上がりの果物だった。昔は始終金を出して果物を食べるということはなかった。美味しい「西瓜」が出てくれば特別で、皆大喜びだった。８人の家族ではあっという間にお腹に収まってしまった。そしてそれは時々しか口にできなかった。なぜか「西瓜」は我が家の畑では作らなかった。「かしうり」はお盆のお供えにも登場した。

(5) 砂糖黍

戦後は皆甘いものに飢えていた。畑の端のほうに一畝ほど砂糖黍を植えておく。植えるといっても、前の年の黍(きび)の種を播いておくのだ。その頃の砂糖黍は沖縄や奄美の製糖用のものと違って細かったし皮も薄かった。学校から帰ると鉈（なた）を手に畑に出かける。２本くらい切り倒して、また節毎に切り揃える。皮をはぐのは歯でやった。皮はかたく下手をすると口の端を切ってしまって血が出る。中の芯をガシガシかんで甘い汁を吸うのだった。滓（かす）をぺっぺっと吐き捨てながら汁を吸うのだった。八百屋でも節毎に切って束ねたものを売っていた。

(6)とうきび(唐黍＝とうもろこし)

柳川では「とうきび」と言った。これも畑に植えた。その頃のとうきびはもちもちしていてとても美味しかった。専ら茹でて食べた。最近売っているのは甘みはあるが水っぽい。あの頃に食べたとうきびが懐かしい。

(7)トマト

我が家の畑ではトマトを沢山植えた。夏の食卓に上るだけでなくおやつの代わりになるのだ。学校や泳ぎなど遊びから帰っても普段おやつなどない。すぐ畑に行って熟れたトマトを見つけてはもいで、ズボンやシャツでこすって拭いてがぶりとやる。夏の陽ざしで熱くなっているが、熟した新鮮なトマトは美味い。いくつか持って帰って水道の水に浸けるが、冷えるまで待てず腹に収まってしまった。冷蔵庫などない時代である。当時のトマトは美味しかった。畑で熟していたからだろうか。最近食べるトマトはあまり美味くない。何故だろうか。

学生時代に福岡の箱崎に間借りをしていた。今は亡き高須信治君と近くの八百屋でトマトを1貫目(3.75kg)買ってきて、井戸水を張った盥（たらい）にいれて冷やしながら碁を打った。トマトに少し塩を付けて鱈腹食った。昼飯の代わりだった。冷たい熟した赤いトマトは美味かった。忘れない。

6)舟遊び

我々の子供の頃、「観光川下り」などというものはまだなかった。当時、柳川といっても城内だが、舟を持っている家があちこちにあった。我が家には無かったが親戚の宮川の家にはあった。川（堀）の側に家があるのと又それだけの財力のあるのが条件だったろうか。夏、宮川壮君と２人で舟に乗り堀を上下に漕いで回った。

ドンコ捕り用の竿を用意して乗り込む。竿の先に小竹を直角に付け、中にテグスを通し先に釣針を付ける。釣り針の先にミミズをつけ、それを石垣の隙間に差し込むのだ。ドンコは流れの底の砂利の上にじっとしているものもいるが、石垣の隙間に潜んでいるのもいる。ドンコはよく食いついて釣りやすかった。甘辛く煮ると美味かった。

次に、ザリガニである。これは堀端の土手の斜面の穴の中に潜んでいた。そこに手を突っ込んで引っ張り出すのだ。こちらも泥で汚れるがやむを得ない。ザリガニも茹でると赤くなり美味かった。海老と同じ味と思った。舟を漕いで鋤崎土手から国道橋あたりまで堀を遡ったこともあった。「さんのうさん（山王さん＝日吉神社）」にも行った。

7) ホンダイ（ギンヤンマ）

ギンヤンマのことを我々は「ホンダイ」と言った。とんぼには種類が多い。よく目にするものにもクワガタ、しおから、あかとんぼ、おはぐろとんぼ、いととんぼ、などいた。しかし、我々にとってとんぼの王様は「ホンダイ」だった。「ホンダイ」は川面をすいすいと行ったり来たり飛び回る。時々杭や竹竿の先などに止まる。我々は「ホンダイ」を捕まえるのに一生懸命になった。狙いはメスである。ようやく捕まえたメスの腹を１メートルほどの糸で結ぶ。糸の一方を１メートル程の竹の棒の先に結ぶ。オスの「ホンダイ」が見えたなら、それを持って橋の上で「ホンダーイ、ホンダーイ、ホーンダイヨー」と言いながら、大きな輪を描くように振り回すのである。オスが飛んできてメスに絡んできたら回す輪を小さく低くしていって地面に下ろして、もう一方に持った網をかぶせて捕まえるのである。「ホンダイ」を捕まえると皆大喜びだった。

共に遊んだ信人も繁幸も壮も信治も既に逝ってしまった。遠い少年の日の思い出である。

ヤナガワノナツハアツカ、ムシアツカ、アツーシテノサン。バッテン、ヤナガワニカエロウゴタル。フネニノローゴタ。ドヨウノウシニ、ウナギメシバタブーゴタ。カハイラン、セカラシカ。バッテン、ホンナコテナツカシカ。

柳川徒然草 その六

高4　小野硯一郎

ほたる

熊本県の北の端にある菊池渓谷の入り口に「菊池渓谷温泉・岩蔵」という宿がある。此処は数年前に出来た宿で、全て離れ式の各部屋に専用の露天風呂が付いた十四室の小ぢんまりした宿であり、各室は菊池川に面し、付属の露天風呂も川沿いにあるので、眺めが良く、川のせせらぎが少しうるさいくらいで、長閑である。

夫々の露天風呂は両隣の露天風呂との間に板囲いの仕切りがあるが、川の方はオープンである。最初行った時、宿の人に「向う岸から覗かれはしないか」と聞いたら、「向う岸は急峻な上に、樹木が生い茂って簡単には行けません。川もこの範囲は禁漁区で釣りに来る人は居ません。心配ないですよ」と言う。その後度々泊まったが確かに川や対岸に人影を見たことはなかった。

この様な立地と設えなので、最近よくある「露天風呂付客室の宿」にありがちな、確かに部屋の外に露天風呂はあるが、前後左右板や竹などで取り囲まれているのとは随分違って、中々風情が良い。私も家内も気に入っている。

特に家内は、古希を迎えた最近、生まれつきの腰骨の変形が酷くなって、他人と一緒に裸で風呂に入るのを嫌がっていたので、この露天付きの部屋は大変気に入っていて、年に春秋二回ばかり行っている。

昨年六月頃、行ってみようかと思い宿に電話したら、今蛍が一番よく出て居る時期です。是非お出で下さい、と云うので出かけて行った。この時は何故か蛍は少なく、数匹がご挨拶の様に飛んでみせた程度であった。これでは見たとは言えないので来年は多い頃に行こうと期待していた。

蛍は、宿の説明によると、雨の降らない少し曇った、気温二十度以上の時、静かな川べりに出る。

明るい光は好まない。従って客室の明かりが漏れない様にしなくてはならないと云う。

今年、蛍の時期になったので予め模様を聞いていた通り、宿に問い合わせたら、今一番良い時だと云う。しかも今日は月曜日でお部屋も空いていますので、どうぞお出で下さい、とのこと。早速予約をして、午後三時頃から車で出かけた。五時前に宿に着いた。

まず部屋の露天風呂に家内と一緒に入った。言い訳がましいが、此処の露天風呂は部屋から十数段の木造の階段を降りなくてはならず、しかも岩風呂なので足場が悪く、私が附き添ってやらねば危ないのだ。それに、年に数回くらいは老夫婦二人で一緒に温泉に、しかも露天風呂に浸かるのも良いものだ。

七時過ぎに夕食を終えて部屋に帰り、部屋の電灯を消して、窓から次第に暗くなる川の方を今か今かと二人で凝視していたが「ほたるちゃん」はなかなか登場しない。諦めて暫くテレビのニュースを見て、八時になったので、また灯かりを消して二人で窓から目を凝らしていたら、「出た！」と思わず一緒に声を上げた。

眼が慣れて来るに従い〝居るわ、居るわ〟部屋の窓から見える川べり、対岸の樹木の上の方を、それこそ〝すーい、すーい〟と乱舞している。我々は暫し陶然としてこの様を眺めた。暫くして先程宿の人が「少し下流の橋の付近に多い」と言ったのを思い出し、懐中電灯を持って出かけた。

家内は、暗い所を歩くのは怖いので、部屋から見ていると云って来なかった。

橋の近くに行ったら、同じ宿の客らしい二人連れが二組見に来ていた。流石にこちらは蛍は多いが、岸辺の草が伸びていて蚊が多いので早々に引き揚げた。それでも見事であった。

部屋では、家内が「見くたびれて」横になっていた。

それからまた二人で温泉に浸かり、お湯の中から〝ほたる〟を眺めた。ただ、蛍は何故か、我々の近くにはやって来なかった。きっと遠慮したのかも…。

そして不思議にも夜の十時頃には次第に蛍の姿は見えなくなった。

概ね二時間のショーであった。「今どきは〝ほたる〟も時間制なのだろうかね」と言って二人で笑った。

でも久し振りに、素晴らしい「ほたるショー」を楽しんだ。

〔平成二十年九月　　記〕

AI時代に想うこと

高41　　下河敏彦

AIを使ってみました

ついこの間、スマホを買い換えました。親子ほど年の離れた爽やかなイケメンお兄さんから一方的に説明を受けたが、ＡＩを搭載しているので写真の加工など確かに楽しく便利な機能がありそうです。

ＡＩと言えば、最近仕事でも使っています。防災調査をしていると最近の自然災害の多さや危険度予測の要望を、ＡＩで解決しようという機運が高まっています。伝習館高校のインスタグラムを見たら、「日本経済大学教授、吉原さくら氏をお招きし、生成ＡＩ「ChatGPT」 の授業等への活用に関する職員研修会を実践しました。日々進歩するＩＣＴ教育を体験し、貴重な研修会となりました。」と紹介されていました（ちなみに「福岡県立伝習館高校で実践しているＩＣＴ教育を楽しそうに学ぶ生徒たちのイメージ画像」と入力して ChatGPTにかけて画像を作成してみました。制服の違いは置いといて、やっぱり機械的、無機質な表情ですね）。

窓の多様化

私たちの時代の「窓」と言えば、「教室の両側」にあるもので、授業中”ぼけっ”としとって「こら、誰に見とれとったんかいな」と叱られる程度の、情報の密度の低いのどか～なものでした。当時の先端といえば、「〇〇先生”ワープロ”のはやかよ～」という会話が聞こえる程度、当時のコンピューターには必要な情報を自ら収集して蓄積する能力はなく、人が手動で一般常識レベルの膨大な知識を入力しないと使えないため、結局「清書機械」以上の使われ方を目にすることはほとんどありませんでした。自分の将来は旺文社の蛍雪時代（電話帳のような厚さといってもわからんか…）をめくって、どの大学にどんな学部があるのか、先生と相談して妄想を膨らませたが…。

そんなことを振り返りながら、私たち高校41回生（平成2年3月卒。アルバムの作成作業は、平成になったばかりの初夏で、新時代の春の息吹きを感じながらの作業です）の卒業アルバムを読み返してみました。

次の写真は、いま校長室・職員室、理科講義室などになっていますが、当時は２階が２年９組と10組(私は２年10組)、３階は３年９組・10組（私は３年９組）でした。窓から顔を出しているのは３年９組だったクラスメイト）。

ツツジの花の解像度が若干？ですが、当時カメラ自体が貴重で今みたいにスマホＡＩで補正してくれるようにはいきません。そしてアルバム作成の作業風景これぞ「カット＆ペースト」。カットのアイコンが“はさみ”である所以です。

いまのアルバム作成は、クラウドを使いみんなで確認しながら作成するのでしょうね。思い出は年とともに風化し想像力を掻き立て、時に大げさに美化するのが楽しいか、ほぼ永久に劣化しないデジタル媒体として保存し、いつでも正確に引き出せるアルバムが楽しいか、そのハイブリッドが一番いいのか、答えなき雑談の楽しは同窓会でしか味わえないのかもしれません。

文字どおり「Windows」 という窓ができ、世界とオンラインでつながりやすくなった1995年からもう30年です。年を重ねると「あれから何年」が増えてきて、何度目かの「サラダ記念日」だったり、「ANNIVERSARY」 だったりして、日々が使い古されていきます。それをリフォームするために、ときどきこうやって、自分や友人の近況、想い出、未来について、酒を酌み交わしながら語り合うことにしています。

伝習館高校　インスタグラムより
https://www.instagram.com/p/DAamrx7TZUd/?utm_source=ig_web_copy_link&igsh=MzRlODBiNWFlZA==

高校41回生
（平成2年3月卒業アルバムの作成作業）

ChatGPTで作成した高校生活の
イメージ画像

ChatGPTで作成した柳川のイメージ画像。やっぱり違和感あります　→

句集「柳川んボレロ」（時々柳川弁）より

高2　斜庵・小野善睦

新年・一月

水垢離の　山伏走る　家並かな

一月、各家の前に水を入れたバケツを出す。殆ど裸の山伏が「オーダイダイ、コダイダイ！」と大声で連呼して走り、各戸の前のバケツの水をかぶって回る。そんな寒行風習が昭和の十年代にありました。

ホンゲンギョ　みんな幸せ色の頬

ホンゲンギョ＝どんと焼き。左義長

土竜打ち　いつの間にやら　チャンバラに

「もぐーら打ちゃ十四日！」と大声で連呼しながら、笹竹の先に藁縄を巻いた棒で、家の周りや畑の道など地面を叩く。一月十四日の行事。男の子が担当する。

歌留多会　ヨカラカオンゴニ　ヨカジョンジョン

歌留多取　札よりあの子の　手を狙ひ

普段は入れて貰えないお邸の大広間に、正月、歌留多会で晴れ着の子供たちが十人近く参集する。男女混合チームが相対して、団体戦が始まる。はじめは温和しく、すぐに、喧々囂々！ヤカマシカ！

・ヨカラカオンゴ－お淑やかな、お利口さんの女の子。
・ヨカジョンジョン－お利口さんのお坊っちゃん

二月

雪釣や　弟生まれし　朝の庭

昭和十二年二月十一日、弟が生まれた
四歳の兄となる、人生初めての記憶
お産の手伝いに来てくれていた隣のハーシャンオバシャンと庭に積もった雪を釣って遊んだ。
「あんたは今日からアンシャンバイ！
トンカジョンタイ！お利口にセントデケンよ」
と言われて、「ウンウン」。

三月

古雛（ふるびいな）　幾代（いくよ）の姫の　祭りしや

「御花」の古雛「文久雛」

傾ぎつも　文久雛と　したしまれ　　立花　文子

雛壇の　菱餅の紅　反りかへり　　〃

古雛　納めし　妣の手の白し　　原田（立花）万紗子

四月

欄干橋　大曲(ウーマガリ)して　柳風

西鉄柳川駅を出ると、真っすぐ欄干橋の下の「川下り」乗船場に向かい、小舟に乗る。すぐに、国道橋（柳川橋の通称）の下をくぐり大きく左に曲がる。これをウーマガリという。曲がると両岸に青柳の並木が迎えてくれる。「アーアやっと、柳川に還った」と実感する。

五月

幼な恋　その子の横笛　舟舞台

舟芝居上り囃子はオランダ調
舟芝居女のうなじ白くして
舟舞台子ども囃子に湧く拍手
以上三句・原田（立花）万紗子
お囃子はオランダ訛舟芝居
斜庵

七月

中井堰(なかゆび)や　裸の子等の　社交場

中井堰―枝光にある。外堀の堰の上流にあるプール状の遊水池

悪餓鬼どもの悪戯作戦談合？

開閉橋　裸の子らの　高飛び込み

弱虫の子は手摺から「ゴンボ入り」
普通の子は手摺から「ガメ入り」
度胸のある子は開閉桁の上から高飛び込み

九月

「ヒッシャンオー」連呼し
茹菱量り売り

蜘蛛手網　九月の雲を　掬ひをり

白秋詩　この川や　まだ張りすてて　露(あら)はなる
蜘蛛手の網も　良き月夜なり

十月

大賑会(オニギエ)や　ドロツクドンと　踊山(おどりやま)

踊山は踊舞台の付いた山車（季重なり？）

オニギエ―三柱神社の秋季大祭。ドロツクドンの山車と踊山車が各々2、3台市内を練り歩く

ドロツクドン―江戸の囃子を取り入れたという山車。山車の上で若衆一人が珍妙滑稽な踊りを披露し笑いを誘う。笛・鉦・太鼓で「ヒューヒュウル、ドンドンヒュル、ヒュルドンドン」と単調な囃子を繰り返す、調べに乗って身振り手振り軽やかに、時には猿の様に山車の柱を上ったり下ったり。観衆を笑わせる。小学校の同級生エイチャンは上町の名人で、人気絶大だった。

踊山車―山車の上が踊り舞台になっていて、踊り子たちが交代で踊る。斜庵も昔、法被股引姿で、踊山を牽いて廻った。

ドロツクドン

※俳句をやっている人、これから俳句を やろうと思う人は以下へメールを下さい。
ono446@nifty.com　小野善睦

季節の絵はがき

高 14　井上　晴美

高志会同期会終了のお知らせ

高志会は、伝習館高四回卒の全体あるいは各地の同窓会が事実上解散した後、関東高志会を名称変更し、全国の同窓会として存続してきました。

その間、２０１４年には歴史と伝統のある「綱町三井クラブ」で傘寿記念の懇親会を開催し、翌年もこれを踏襲いたしました。

共に、柳川をはじめ九州各地、あるいは大阪、名古屋、東北からの参加も得て、盛大な同窓会となったことも想い出として残っております。

その後、上野公園の「旦妃楼飯店」での３年続けての開催を経て、２０１９年の銀座「クルーズクルーズ」を最後に、コロナ蔓延の影響もあり開催を見合わせて参りました。

然るところ、昨年あたりから二～三の会員から高志会再開の要望が寄せられ、４月２４日、１０名の参加により、５年ぶりに「２０２４年度高志会」を開催した次第であります。

当日は、久闊を叙し、長らく歓談の時を過ごすことができましたが、欠席者の消息なども知ることとなり、卒寿となる自らの齢に改めて思い至る機会ともなりました。

なお、その場において、今後の高志会の存続について協議した結果

①今回を以て高志会の運営を終了し、解散する
②今後は、個々人が、随意かつ随時呼びかけて参集するのみとする。

旨の合意がなされ、高志会としての運営は、本年を以て終えることになったので、この旨ご報告申し上げます。

最後に、これまで長きにわたりご協力いただいたクラス幹事や会員のみなさまには、ここに厚く御礼申しあげます。

２０２４年５月７日　　渡邊喜亮

賛助金の振り込み方法

① 同封の郵便振替用紙で送る
② 銀行振り込みで送る場合
三井住友銀行(銀行コード０００９)　鶴見支店（店番号５７２）
普通預金　口座番号７３２９４１１　口座名＝伝習館東京同窓会
　いずれの振り込みの場合にも〇回生、または卒業年度をお書きください。通信欄には近況、会報へのコメントもどうぞ。

◆賛助金について
　伝習館東京同窓会は会費制を取らず、会員の皆様の篤志である賛助金により成り立っています。東京同窓会に集まる賛助金は会員への通信、会報の発行、ウェブサイト代、総会・親睦会・交流会等の補助などの経費に使用されており、皆様から頂く賛助金が東京同窓会の運営を支えています。1口2,000円から何口でも結構です。(半口1,000円でも受け付けています）。同封の郵便振替用紙にて送付いただき、(ない場合は銀行振り込みへ)、ご協力よろしくお願い申し上げます。

◆会報応募要項
・伝習館卒業生ならだれでもOKです。ウエブ版にも対応しています。
・テーマは取り立ててありません。(同窓会に相応しいもの、審査あり。編集委で選びます)
　字数制限なしだが常識的範囲で(ワード原稿をメールで送付してください)。
　随筆、詩、俳句等のほか、写真・絵・カットの添付も可。
※原則10月20日締め切り
　北島　正常　行き　　伝習館高校　東京同窓会
　Eメール＝anc54684@nifty.com　　携帯 090・5532・0323　もしくは denshukan.tokyo@gmail.com

---

編集後記
　今回から限定会員に冊子版の会報25号をお届けしております。会報の電子版を前号から始めましたが、紙媒体を愛読していただいた方からの要望もあり、会報を必要とされる方々に用意しました。編集委の手作りで進め、何とか形になりました。些少でもお役に立てれば幸いです。５月には東京同窓会総会も開催されます。皆様、また元気な姿でお会いしたいと思います。(北島)

会報も掲載されるウェブサイトは以下のとおりです。
伝習館高校東京同窓会　https://denshukan-tokyodearfriend.org/

編集委員は以下のとおりです。
北島　正常(編集長、高21)
西原　正道(高21)
山田　公徳(高33)
池上　英次(高35)
下河　敏彦(高41)
弥永　邦夫(高42)

会長　白谷政則(高21)
副会長　椛島　正司(高16)
　　原田　万紗子(高13)
発行責任者　白谷　政則

事務局は以下のとおり
〒230-0073　横浜市鶴見区獅子ケ谷１－９－１
白谷方
伝習館東京同窓会事務局
☎０４５・５８１・８１９３(兼ファクス)

Topics

同窓会親睦会が久々に開かる

東京同窓会総会(隔年)の合間に開催される同窓会親睦会が5月25日久々に五反田で開催されました。夜の開催のため年輩で見送られた方もいたがミドル世代を中心に100人近くが会場のニューぼたんに集合。山田公徳さん(33回生）がまとめ役となり準備を始め、当日は進行役も務めました。柳川から大同窓会の林俊輔実行委員長(46回生）も上京し、東京同窓会と交流。皆さん居酒屋スタイルの気安さも手伝って、盛会のうちに幕を閉じました。

JAL社長に同窓生、鳥取三津子氏就任

令和6年4月、本校卒業生の鳥取三津子さん（高34回生）が日本航空（JAL）社長に就任されました。同社でＣＡ出身、女性が社長となるのは初めてのことです。

鳥取三津子さんの経歴を紹介すると、三潴郡城島町（今、久留米市）の出身で、伝習館高校から活水短大へ進学。85年に東亜国内航空（現日本航空）に入社しＣＡとして現場を務めその後客室本部長、カスタマー・エクスペリエンス本部長を歴任。以後、常務、専務を経て、この度社長に昇格されました。

就任に当たっては「安全とサービスが自分のキャリアそのもの。安全運航の大切さを継承し、お客様を第一に思い運航を重ねてまいります」と語る。

同窓会の皆様方にとっては、伝習館高校の後輩、先輩となる鳥取社長。今後とも健闘をお祈り致しております。

東京同窓会ゴルフ同好会の報告

第11回　東京同窓会コンペ　　令和6年3月4日

川越カントリークラブ　天気・晴天　　優勝＝西原正道(高21回)

春とはいえ、肌寒い３月初めの11回コンペ に10人が参加(女性２人)しました。

西原正道さん＝写真左端が97(51・46、ネット74.2)で回り前回優勝の同期、藤吉達也さん(95、ネット74・6）を振り切り２回目の優勝。殿堂入り(?)に近づきました。

第12回　東京同窓会コンペ　　令和6年10月10日

長南カントリークラブ　天気・曇りのち晴れ

優勝＝大山恵(高32回)

暑さも去り秋晴れも覗く快適な気候のなか、12回目の東京同窓会コンペが千葉・長南カントリーＣで開催されました 。(10名参加、女性３名)

過去の大会でもウーマンパワーを発揮しつつあった女性陣ですが今回一挙に1，2，3位を独占しました。優勝は大山恵さん（32回生、スコアは不詳)。数々の賞金品もうまさとパワーで圧倒した女性陣＝大山、冨重由佳（ベストグロス86とか、素晴らしい！）、大野美佐子さんがごっそり獲得したということでした。次回は春に開催予定です。

三柱神社秋季大祭…おにぎえ（どろつくどん）、高13原田万紗子さん提供

伝習館高校　東京同窓会
https://denshukan-tokyodearfriend.org/

伝習館高校　東京同窓会事務局
〒230-0073 横浜市鶴見区獅子ヶ谷1-9-1　白谷方
TEL 045(581)8193 FAX兼用